

治外法権問題

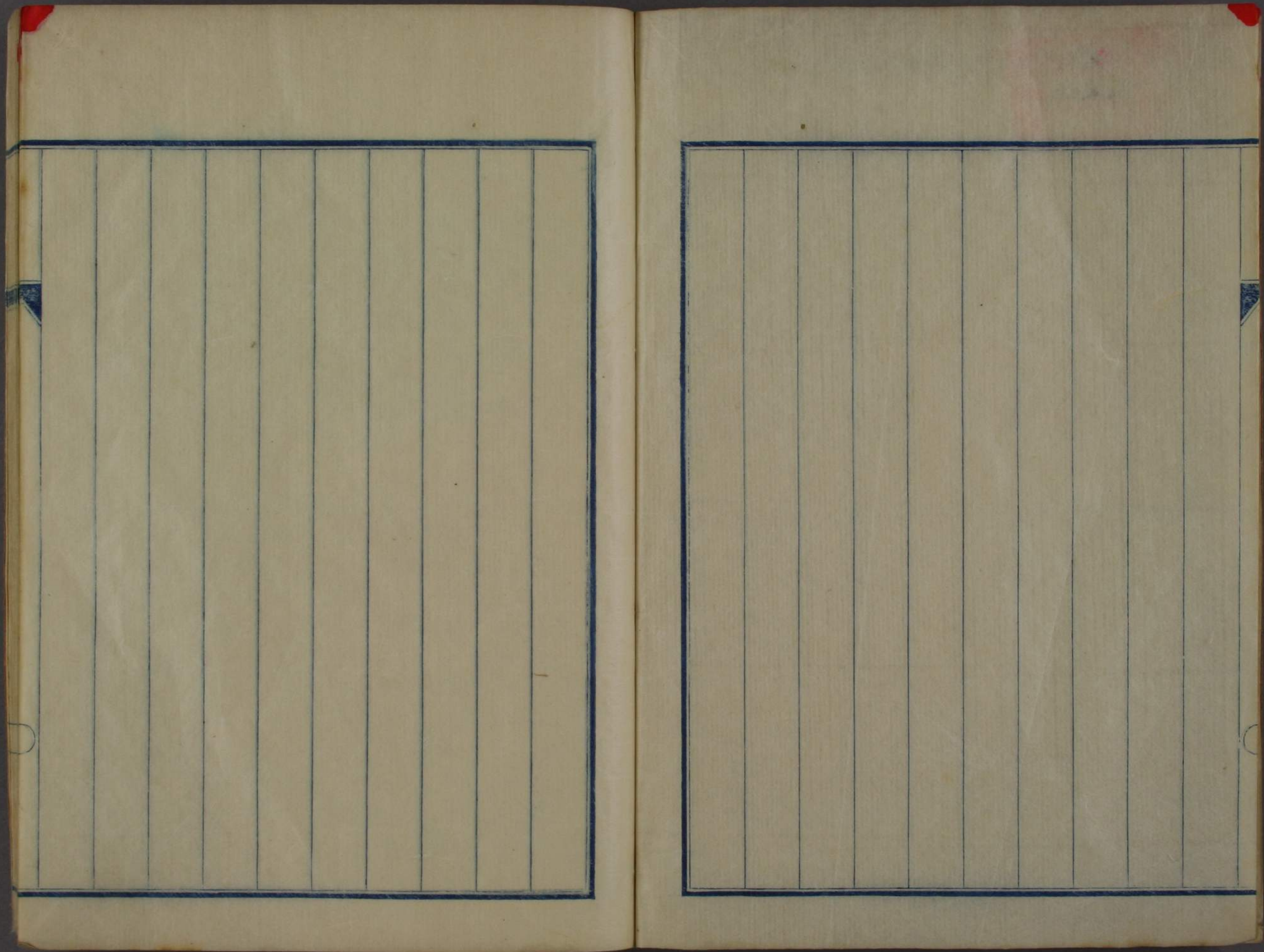
外務省
調査

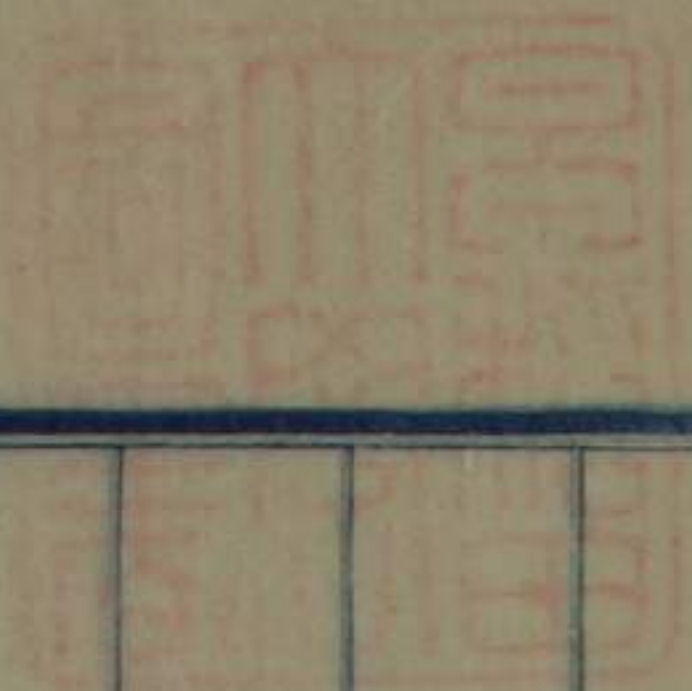
全

7

7 20
2566







一 緒言
安政年間及明治ノ初年歐米諸國ト締結セラルル条約

ハ裁判權ノ内ニ本邦在留ノ外國人ニ二三ノ特權ヲ

付與セリトシ世人之ヲ稱シテ法外法也ト云フ蓋シ

此ノ種ト稱スルニ國際公法上所謂特許法也ト云

フハ各國ノ君主及貴族カ外國ニテモ其國ノ法

律ニ服スルニ非ズ其物ヲ見ルニ英大勳章ノ特權

ハ其種ト稱スルニ及ビテ其種ト稱スルニ及ビテ

其種ト稱スルニ及ビテ其種ト稱スルニ及ビテ



大代國入許所典之四國... 安政年間及明治ノ初年歐米諸國ト締結シタル條約
 ハ裁判權ニ関シ本邦在留ノ外国人ニ二三ノ特權ヲ
 附與シタリ世人之ヲ稱シテ法外法權ト云フ蓋シ誤
 謬ノ見ト謂フヘシ國際公法上所謂治外法權ナルモ
 ノハ各國ノ君主及其使臣カ外國ニマリテ其國ノ法
 律ニ服従スルノ義務ヲ免カル、廣大無限ノ特權ヲ
 レ以現行條約ハ決シテ如此漠大ノ權利ヲ外国人一
 般ニ附與シタルモノニアラサルナリ

(This page contains a large empty rectangular frame with vertical lines, likely a placeholder for text or a diagram.)

然ルニ現行條約締結以來今日ニ至ル迄我政府ニ於
テ條約ヲ実行シ来リタル成跡ニ就キ之ヲ觀察スル
トキハ往々純然タル治外法權ヨリ生スル諸種ノ權
利特典ヲ外國人ニ附與シタルノ感ヲキニアラス隨
テ外國人モ亦其今日享有スル權利特典ヲ以テ恰カ
モ條約ニ遵拠スルカ如ク思惟スルニ至レリ蓋シ
然ルニ今日外國人カ現ニ利用シツ、アル種々ノ權
利特典ハ悉ク條約ニ遵據スルモノニアラス是ヲ以
テ余ハ本書ニ於テ如何ナル權利特典條約ニ據リ之
ヲ外國人ニ附與シ如何ナル權利特典ハ我之ヲ保續

スルヤヲ詳ラカニシ隨テ其條約以外ニ享有スル所
ノモノハ果シテ如何ナル點ニアルヤヲ研究セント
欲ス

外國人カ條約以外ニ享有スル權利特典ニシテ今日
ト雖氏猶ホ或ハ之ヲ收回スヘキモノアルヘシ或ハ
又因襲ノ久シキ遂ニ如何トモスヘカラサルモノア
ルヘク然レド之ヲ回收シ得ヘキヤ否ヤヲ判定シ而
シテ之ヲ外國政府ニ提出スルノ時機如何ハ政略上
ノ問題ニシテ本書ノ闡スル所ニアラス本書ノ主眼
トスル所ハ專ラ現行條約ノ解釋ニ依リ彼我權利ノ

範圍ヲ詳ラカニスルニマルノミ

明治二十三年十一月

編者記

本邦在留ノ外國人ハ法權ニ関シ現行條約ニ因テ附典セ
テレタル權利ノ外ニ如何ナル權利特典ヲ利用シツハア
ルヤ此問題セシニハ先ツ外國人ハ現行條約ニ因テ如何
ナル權利ヲ有スルヤヲ断定シ而シテ帝國政府ハ從來條
約ヲ如何ニ実行シ来リタルヤヲ論究セサル可ラス故ニ
余ハ本書ヲ分ツテ二章トナシ第一章ニ於テ現行條約ノ
解釈ニ依リ外國人ハ如何ナル權利ヲ有スルヤヲ明カニ

本野一郎編纂
治外法權

本邦在留ノ外國人ハ法權ニ関シ現行條約ニ因テ附典セ
テレタル權利ノ外ニ如何ナル權利特典ヲ利用シツハア
ルヤ此問題セシニハ先ツ外國人ハ現行條約ニ因テ如何
ナル權利ヲ有スルヤヲ断定シ而シテ帝國政府ハ從來條
約ヲ如何ニ実行シ来リタルヤヲ論究セサル可ラス故ニ
余ハ本書ヲ分ツテ二章トナシ第一章ニ於テ現行條約ノ
解釈ニ依リ外國人ハ如何ナル權利ヲ有スルヤヲ明カニ

第二章ニ於テ現行條約実行ノ成跡ヲ詳カニセシト欲
ス

第一章 條約ノ解釋

世人ノ往々唱道スル所ヲ聞クニ本邦在留ノ外國人ハ治
外法權ノ下ニアルカ故ニ毫モ本邦ノ法律ト本邦ノ裁判
權ニ服従スルノ義務ヲキカ如ク論スルモノアリト虽モ
安政年間及明治ノ初年ニ歐米諸國ト締結シタル條約ハ
果シテ如此權利ヲ外國人ニ附與シタルモノナリヤ是レ
第一ニ講究セサルヘカラサルノ要點トス

現行條約ハ國別ニ之ヲ締結シタルモノナリト虽モ其含

蓄スル條項ニ至リテハ各國粗相同シ故ニ其一ニ就キ之
ヲ論究シ以テ他ノ條約ニ推及スルヲ得ヘシ是ヲ以テ余
ハ先ツ本邦ノ有ル最モ不利ニシテ且ツ締盟諸國カ常ニ
均霑條款ヲ論據トシテ援用スル所ノ日澳條約ニ就キ立
論スヘシ

日澳條約ヲ五條第六第七ノ三條ハ即チ世人ノ所謂治外
法權ナルモノヲ規定シタルモノナリ其條文ニ曰ク

第五條 日本ニ在留スル澳地利及洪噶利人ノ間ニ身
上或ハ其所持ノ品物ニ付テ爭論起ル事アラハ澳地
兼洪噶利官吏ノ裁斷ニ任スヘシ

日本長官ハ澳地利及洪鳴利ノ人民ト他ノ條約海外
國人トノ間ニ起リタル爭論ニモ亦關係スル事ナカ
ルヘシ

若シ澳地利及洪鳴利ノ人民ヨリ日本ノ人民ニ對シ
訴訟スル事アラハ日本長官其ノ事件ヲ裁斷ス可シ
若シ日本人ヨリ澳地利及洪鳴利人ニ對シ訴訟スル
事アラハ澳地利兼洪鳴利長官之ヲ裁斷スヘシ

第六條 日本人民或ハ他國ノ人民ニ對シ惡事ヲナセ
ル澳地利及洪鳴利人民ハ澳地利兼洪鳴利コンシユ
ラル官吏ニ訴ヘ澳地利及洪鳴利ノ法度ヲ以テ罰スヘ

澳地利及洪鳴利ノ人民ニ對シ惡事ヲナセル日本人
民ハ日本長官ニ訴ヘ日本ノ法度ヲ以テ之ヲ罰スヘ

第七條 此條約或ハ之ニ附屬スル貿易ノ規律又ハ稅
則ヲ犯セルニ付取立ヘキ罰金或ハ其物ヲ取揚ケル
事ハ澳地利兼洪鳴利コンシユラル官吏ニ裁斷ニ因
ルヘシ其取立タル罰金或ハ取揚品ハ都テ日本政府
ニ屬スヘシ

本邦ニ於ケル外國法權ノ範圍ハ此三條ヲ以テ確定シタ

ルモノナリ故ニ此ノ點ニ関シ外國人カ有スル特權ノ區
域モ亦實ニ此三條ノ解釋如何ニアリ

民事ニ関スルノ事項ヲ規定シタル第五條ノ解釋ニ就テ
ハ敢テ異論ヲ唱フル者ナシ本條ノ規定ニ依レハ澳國人
民被告タルノ訴訟ハ悉ク澳國裁判官之ヲ裁判シ澳國臣
民間及澳國人ト他ノ外國人間ノ訴訟モ亦然リ而シテ日
本臣民被告タル場合ニ於テハ日本裁判官之ヲ裁判スル
ノ權アリ故ニ外國人被告タルハ本國裁判官ノ裁判ヲ
受クルノ權利アリト虽氏其原告タル場合ニ於テハ日本
ノ法律ニ從ヒ日本ノ裁判官ノ裁判ニ服從スルノ義務アリ

小ハ主權ハ以テ帝國内ニ屬シ不レ他國ニ及セシメテ
刑事ニ関スル裁判權ニ就テハ種々ノ疑問アリト虽氏其
最モ重ナルモノハ第一如何ナル種類ノ犯罪ト虽氏犯罪
人外國人タル已上ハ外國裁判官ニ於テ之ヲ審判スルノ
權アリヤ第二裁判權ノ執行ニ関スル權利ハ悉ク領事ノ
專有ニ屬スルヤノ二點ニ在リトス

第一問ニ関スルノ說ニアリテ日本ノ裁判官ノ權
第一說ニ曰ク日澳條約第五條第六條ノ精神ヲ考察スル
ハ凡ソ外國人ノ被告タル場合ニ於テハ其民事タルト
刑事タルトヲ論セス悉ク日本ノ法權ニ服從セシメサル

ノ趣意ナルヲ見ルヘシ故ニ外國人ハ如何ナル種類ノ罪ヲ犯シタルモノト虽モ本國裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ有スルモノニシテ更ラニ詳言スレハ外國人ハ完全ナル治外法權ノ下ニアルヲ以テ莫モ日本ノ法律ニ服従スルノ義務ナシト

此說ニ從フハ犯罪ノ重罪タリ輕罪タルヲ問ハス又其常事犯タルト國事犯タルトヲ論セス犯罪人ニシテ外國人タル以上ハ日本ノ法權之ニ及フヲ得サルモノトス第二說ニ曰ク日本帝國ハ完全無缺ノ獨立國ナリ故ニ日本ノ主權ハ凡テ帝國內ニ居住スル者ニ及ハサルヘカラ

サルハ論ヲ俟タスニテ明カナリ安政年間及ヒ明治初年ノ條約ハ此主權ヲ制限シ其法權ニ関スル一部分ヲ外國人ニ附與シタリト虽モ是レ實ニ一ノ例外ニ過キス故ニ條約面ニ因テ附與セサル權利ハ悉ク我カ保護スルモノト云ハサル可ラス而シテ如何ナル權利ハ之ヲ外國人ニ附與シ如何ナル權利ハ之ヲ我ニ保護シタルヤヲ識別セシニハ先條約ノ文面ニ據ラサルヘカラサルナリ然ルニ日澳條約第六條ハ澳國ノ人民日本ノ臣民ニ對シ罪ヲ犯シタル場合ヲ規定シタルモノニシテ所謂一私人ニ對スル犯罪ノ場合ヲ豫定シタルニ過キサルナリ *Quarta*

Hungarian citizens who may commit any crime against Japanese subject

故ニ外国人ニシテ若シ日本ノ皇室ニ対シ又ハ日本ノ國家ニ対シ罪ヲ犯シタル場合例ヘハ天皇ヲ殺害センコトヲ謀リタルカ又ハ日本政府ヲ顛覆センコトヲ企テタル場合ニ於テハ日本政府ハ外國犯罪人ヲ逮捕シ之ヲ裁判スルノ權ヲ有スルモノト云ハサルヘカス何トナレハ是レ凡テ日本臣民ニ対スルノ犯罪アラサレハナリ是ニ由テ之ヲ觀レハ日澳條約第六條ニ因テ澳國ニ附其ニタル裁判

權ハ第ニ日本臣民又ハ他ノ外國臣民ニ対スル常事犯ヲ裁判スルト權ニ過キサルナリ

日澳條約第七條ニ依レハ同條約又ハ之ニ附屬スル貿易規則等ニ違反シタル者ニ対シ罰金ヲ科シ又ハ品物ヲ沒収スル等ノ場合ニ於テハ澳國領事館員之ヲ裁斷スルノ權ヲ有ストアルヲ以テ本條ノ規定ヲ一般ノ場合ニ推及シ外國人ハ如何ナル種類ノ法律ニ違反スルモ之ニ制裁ヲ加フルノ權ハ全ク外國法官ノ掌中ニアルカ如ク論スル者アリト雖モ是レ蓋シ其當ヲ得タルモノト云フヘカラス何トナレハ本條約第六條ノ規定ト云ヒ同第七條ノ

規定ト云ヒ均シク是レ例外的ノモノナレハナリ殊ニ第
七條ヲ如キハ條約其他之ニ附屬スル貿易規則及税則ノ
違反ヨリ生スル場合ノミヲ豫定シタルモノニシテ決シ
テ一般ノ法律違反ニ及ホスヘキモノニアラサルナリ明白
ナリ
以上陳ヘタル所ノ第二說ニ從フキハ外國人ハ明ラカニ
條約ニ因テ附與シタルモノ、外何等ノ權利モ之ヲ有ス
ルナシ而シテ外國人カ法權ニ關シ得ル所ノ特權ハ蓋
シ九ノ點ニ過キサレヘシ
一民事訴訟ニ於テ被告タルキハ事件ノ大小ニ關セス

本國領事ノ裁判ヲ受ルル權
ニ刑事ニ關シテ日本臣民又ハ他ノ外國臣民ニ對シ常
ニ事犯ノ部類ニ屬スル罪ヲ犯シタル場合ニ於テ本國
領事ノ裁判ヲ受クルノ權
三條約ニ違反スルカ又ハ之ニ附屬スル貿易規則及ヒ
税則ニ違反シタルトキ領事ノ裁判ヲ受クルノ權
以上陳ヘタル所ニシテ果シテ誤リナカラシメハ法權ニ
關シ日本政府カ現行條約ニ因リ外國人ニ對シテ尚保有
スル所ノ權利ハ九ノ如シ
一皇室及國家ニ對スル犯罪ヲ裁判スルノ權

二 外國人ニ對シテ行政處分ヲ施行シ及ヒ行政上ニ関
スル法律規則ヲ執行スルノ權

三 警察ヲ執行スルノ權

第二 裁判權ノ執行ニ関スル 附屬權即ハ裁判ヲ執行
スルノ權又ハ犯罪人ヲ逮捕スルノ權等ハ悉ク領事ノ專
有ニ屬スルモノナルヤ

民事裁判ノ執行ニ関シテハ日澳條約第五條ヲ五項ニ於
テ之ヲ規定シタルモノ、如シ其文ニ曰ク各ニ於テ本國
若シ日本人澳地利洪噶利人ニ逋債アリテ之ヲ償フ
ヲ怠リ或ハ欺偽ヲ以テ逃走セントスル時ハ相當ノ日

本長官是ヲ裁斷シテ其債主ヨリ逋債ヲ償ハシルル為
メ諸事ニ尽カスヘシ又澳地利及洪噶利人欺偽ヲ以テ
逃走セントシ或ハ日本人ニ逋債ヲ償フヲ怠ル時ハ
澳地利兼洪噶利長官正シク裁斷シ逋債ヲ償ハシムル
為メ諸事ニカヲ尽スヘシ

本項ノ意義ヲ虚心平氣ニ解釋スルハ裁判ノ前後ニ拘
ハラズ日本人義務ヲ弁濟セサルハ日本ノ裁判官ニ於
テ其義務ヲ弁濟セシムルノ手段ヲ施スヘク又外國人義
務ヲ弁濟セサルトキハ外國裁判官ニ於テ相當ノ方法ヲ
以テ之ニ弁濟セシムルヲ勉メサルヘカラス故ニ日本

人被告タル場合ニ於テ若シ敗訴シタルトキハ日本裁判官其裁判ヲ執行セシメサル可ス又外國人被告タル場合ニ於テ敗訴シタルトキハ外國裁判官即チ領事ニ於テ其裁判ヲ執行セシメサルヘカラサルナリ

外國人原告タル場合ニ於テ敗訴シタルハ日本裁判所ハ之ニ對シ裁判ノ執行ヲ命スルノ權アリヤ例ヘハ裁判所ニ於テ訴訟ノ費ヲ原告タル外國人ニ負担タルヘシト判決シタル場合ニ於テハ日本ノ執行吏ハ直接ニ外國人ニ對シ其裁判ヲ執行スルノ權アリヤ又ハ外國領事ノ認可ヲ得タル上ニアラサレハ之ヲ執行スルヲ得サル

ヤ是亦講究セサルヘカラス

現行條約ニ拠レハ外國人ハ日本裁判權ニ服従スルノ義務アリ詳言スレハ外國人原告タル場合ニ於テハ日本裁判權外國人ノ上ニ及ブモノナリ故ニ外國人ハ其訴訟ノ勝敗ニ関セス帝國裁判所ノ判決ニ服従スルノ義務アリト云ハサルヘカラス隨テ外國人若シ之ニ服従セサルトキ裁判執行吏ハ之ニ對シ日本人同様ノ處分ヲ爲スヲ得ヘシ

刑事裁判ノ執行ニ関シテハ特別ナル明文ナシトモ氏彼我各自ノ法律ニ從ヒ之ヲ執行スヘキハ蓋シ論ヲ俟タサ

ルヘシ故ニ刑事裁判ノ執行ニ関シテハ取テ大ナル疑問
ナシト虽氏犯罪人逮捕ノ件ニ付テハ大ニ論議スヘキモ
ノアリ

日澳條約第六條第一項ニ曰ク Austro-Hungarian
citizens who may commit any ^{crime} aga-
inst Japanese subjects or the subjects
of any other nation shall be brought
before the Imperial and Royal
consular officer and punished
according to the laws etc etc -

本条ニ據レハ外国人日本人ニ対シ罪ヲ犯シタル場合ニ
於テハ本國領事ノ裁判ヲ受ケ本國ノ法律ニ從ヒ刑ニ處
セラル、ノ權アルトハ甚々明瞭ナリト虽氏犯罪人ヲ逮
捕スルノ權ニ付テハ單ニ shall be brought
云々トアルノミシテ彼我孰シニ於テ之ヲ逮捕スヘキヤ
ハ取テ之ヲ明言セス是ニ於テカ説ヲ為ス者アリ曰ク日
澳條約第六條ニ據レハ外国人罪ヲ犯シタルキハ自國領
事ノ裁判ヲ受クルノ權アリト虽氏犯罪人ヲ逮捕スルノ
權ハ日本政府ニ專屬ス何トナレハ現行條約中主權利ヲ
外国人ニ附與シタルノ明文ナケレハナリ余ヲ以テ之ヲ

観レハ未タ死スシモ一概ニ外國領事ハ逮捕権ヲ有セス
ト断言スヘキコアラス宜シク種々ノ別ヲ有スヨ要スヘ
シ
現行条約中逮捕権ニ関シ特別ノ規定ナシト虽氏苟モ外
國領事ニ幾分ノ裁判権ヲ附與シタル以上ハ其附與サレ
タル權利ヲ執行スルニ必要歟クヘカラサル權利ハ條約
中明文ナシト虽氏暗ニ之ヲ附與シタルモノト認定スル
モ敢テ不當ノ事ニアラサルヘシ然ルニ犯罪人ヲ裁判ス
ルノ權利ヲ有スルモノニシテ若シ之ヲ逮捕スルノ權利
ナキハ實際其裁判権ヲ執行スルヲ得サルノ結果ヲ見ル

ニ至ルヘシ果シテ然ラハ犯罪人ヲ逮捕スルノ權利ハ實
ニ裁判権ヲ執行スルニ歟クヘカラサルモノナリト云ハ
サル可ラス是ヲ以テ領事ハ犯罪人ヲ逮捕スルノ權アリ
ト断言スルモ敢テ不可ナキナリ
然ラハ則テ領事ハ如何ナル犯罪人ト虽氏之ヲ逮捕スル
ノ權アリ又余ハ前段ニ於テ外國人ニシテ若シ皇室ニ對
シ罪ヲ犯シタルカ又ハ日本ノ國家ニ對シ罪ヲ犯シタル
場合ニ於テハ我法權ノ外國人ニ及フヘキ理由アルヲ論
定シタリ故ニ如キ場合ニ於テハ外國領事ハ犯罪人ヲ逮
捕スルノ權ナシ而シテ之ヲ逮捕スルノ權ハ全ク日本政

府ニ帰セサルヘカス

通常ノ場合ニ於テ領事カ其同國ノ犯罪人ヲ逮捕スルノ
権アルハ以上陳ヘタルカ如シ而シテ日本政府ハ外國領
事ト等シク之ヲ逮捕スルノ権ナキ乎此問題ヲ決スルニ
ハ宜シク現行犯ト非現行犯トヲ區別シテ論究スルヲ要
ス

一現行犯 現行犯ノ場合ニ於テハ如何ナル犯罪人ト虽
モ日本政府ニ於テ之ヲ逮捕スルノ権アルハ論ヲ俟タサ
ルナリ何トナレハ孰レノ國ト虽モ現行犯罪人ヲ逮捕ス
ルニハ敢テ当該官ノ令状ヲ要セス警察官ノ專斷ヲ以テ

之ヲ決行スルノ慣例ナレハナリ

二非現行犯 此ノ点ニ付テハ議論ニ派ニ分レ孰レモ多
ノ理ナキニアラス

第一説ニ曰ク犯罪人ヲ逮スルノ権ハ是レ裁判權ノ一部
分ニ過キス然ルニ日本政府ハ外國人ニ對シ裁判權ヲ有
セス故ニ外國人ヲ逮捕スルノ権ナシ

第二説ニ曰ク現行條約中日本政府ハ外國人ヲ逮捕スル
ノ権ナシト規定シタルノ明文ナキヲ以テ假令外國領事
ニ逮捕権アリトスルモ未タ必スシモ日本政府ニ於テ之
ヲ保有セサルモノト斷定セサルヘカラス抑モ現行條約

ニ因テ裁判権ノ一部分ヲ外國人ニ附與シタル所以ノモ
ノハ條約締結ノ當時日本ニ行ハシタル苛酷ノ刑ヲ外國
人ニ加ヘケラシムニアリ決シテ日本ノ公安ヲ害スルノ
特權ヲ外國人ニ附與シタルモノニアラサルナリ故ニ外
國人ニ犯罪アルハ之ヲ逮捕シテ外國領事ニ引渡スルハ
外國人ハ敢テ之カ爲メニ自己ノ權利ヲ侵害サレタルモ
ノト云フヘカラス是ヲ以テ條約ノ文面ヨリ之ヲ論スル
モ亦其精神ヨリ之ヲ論スルモ日本政府ハ毫モ外國犯罪
人ヲ逮捕スルノ權ナシト斷定スヘカラサルナリ
然レハ則テ外國ニテ罪ヲ犯シタル外國犯罪人日本ニ逃

亡シ来リタル場合ニ於テハ如何
此場合ニ於テハ領事ハ之ヲ逮捕スルノ權ナシ何トナシ
ハ外國領事ハ日本ニ於テ或ル罪ヲ犯シタル外國人ニ對
シ裁判権ヲ有スルト雖モ外國人ニ對シテ毫モ裁判権ヲ
有セサレハナリ

第二章 條約實行ノ成績

前章ニ於テ陳ヘタル所ニ因テ日本帝國カ現行條約ヲ以
テ法權ニ關シ外國人ニ附與シタル權利ハ如何ナル莫ニ
アルヤヲ了知スルニ足ルヘシ若シ現行條約ヲ解釈スル
ニ當リ第一說ヲ主張スル者ノ如ク廣義ニ之ヲ解スルハ

ハ今日現ニ外國人カ日本ニ於テ利用スル權利ハ條約ニ
準據スルモノト云ハサルヘカラス若シ之ニ及ビ第ニ説
ニ從ヒ狹義ニ之ヲ解釈スルトキハ大ニ然ラサルナリ今
ヤ姑ク第ニ説ニ從ヒ外國人ノ爲メ條約外ニ我權利ヲ侵
害サレタル要矣ヲ闡陳シ其由テ来ル所ヲ探究セシ
前段ニ於テ陳ヘタル第ニ説ニ從フトキハ條約ニ因テ特
別ニ附與セサル知ノ權利ハ我悉ク之ヲ保有スルモノト
ス今其重大ナルモノヲ列挙スレハ
第一 皇室又ハ國家ニ對シ罪ヲ犯シタル外國人ヲ裁
判スルノ權

第二 行政上ニ關スル法律規則ヲ執行シ及ヒ行政處
分ヲ施行スルノ權
第三 警察ヲ執行スルノ權
第四 裁判ヲ執行スルノ權
現行條約^的 解釈スルニ當リ帝國政府ハ右ノ諸點ニ付キ從
来如何ナル意見ヲ抱キタルヤ請フ以下之ヲ論究セン
第一 皇室及國家ニ對スルノ犯罪
此點ニ付テハ未實際問題ノ生シタルコトナキカ故ニ政
府ノ意見ヲ知ルニ由ナシト虽モ我政府ハ外國人ニ如何
ナル種^類ノ犯罪アリト虽モ之ヲ裁判スルノ權ハ外國領

事ニ在ルモノト思惟シタルカ如シ先ツ一二ノ实例ヲ掲
ケテ之ヲ証セニニ明治七年十一月中外國人ニ適用スヘ
キ銃獵規則ヲ制定スルニ當リ其原案中ニ同規則ヲ犯ス
モノハ領事ニ於テ之ヲ罰スルノ權アルヲ認メタリ
銃獵規則設立
一件提要第二頁又明治十一年中虎列刺檢疫ニ関スル
規則ヲ設クルニ當リ英口公使ハ我立法權ニ干渉シ外國
人ニ適用スヘキ法律規則ヲ制定スルニハ外國公使ノ兼
諾ヲ要スル旨ヲ主張シタルカ故ニ當時ノ外務卿ハ立法
權ニ干渉スルノ一稟ニ於テハ大ニ英國公使ノ所論ヲ弁
駁シタリト雖此犯罪處罰ノ權ニ至リテハ全ク之ヲ外國

政府ニ附其シタルモノ認定セリ檢疫ニ関スル規則設
立一件一第五頁明治

十一月十五日
外務卿書東

以上陳ヘタル如キ犯罪ハ凡テ日本臣民ニ對スルノ犯罪
ニアラスシテ國家ニ對スル犯罪ナルカ故ニ現行條約ヲ
狭義ニ解スルハ蓋シ我裁判所ニ於テ之ヲ判決スルヲ
得ヘキモノナルヘシ
第二行政上ニ関スル法律規則及行政處分
行政上ニ関スル法律規則ハ我政府ニ於テモ明治ノ初年
ヨリ既ニ之ヲ外國人ニ適用スヘキ意アリシカ如シト雖
今日ニ至ル迄未タ之ヲ実行スルニ至ラス適々実行スル

モノアルモ常ニ各國公使ト協議ノ上設定シタル二三ノ
規則ニ過キス(檢疫規則西洋形加之美)加之英國公使ノ如キハ
ホルダーインカウンシルニ準拠シ自國ノ規則トシテ之
ヲ頒布シ英國臣民ヲシテ之ニ服従セシムルノ習慣ヲ養
成セリ(檢疫規則)一唯近年ニ至リ居留地外ニ僑寓ノ外國
人ニ地方税ヲ課スルノ一莫ニ至リテハ聊カ外國人ニ對
シ我行政規則ヲ実行スルノ跡アルカ如シト雖モ未タ全
ク我税法ニ服従セシメタルモノニアラス何トナレハ外
國人納税セサルトキハ我政府ニ於テハ未タ日本人同様
ニ滞納處公法ヲ適用スルノ意ナケレハナリ(居留地外
僑寓ノ外)

國人ニ對シ行政規則ヲ執行セントシタルト數回アリ
一曰外務大臣内務大臣ノ書柬
件明治廿三年七月

其最モ重大ナルモノヲ舉レハ尤ノ如シ

一 銃獵規則ノ件

現行條約ハ外國人ニ銃獵權ヲ附與セス然ルニ萬延元年
十月中英國人モスナルモノノ神奈川ニ於テ游獵シ日本官
吏ニ負傷セシメタルヲ以テ當時ノ政府ハ之ヲ本國ニ送
還セシメ且千弗ノ償金ヲ拂ハシメタリ(銃獵規則其後
立一件提議)
明治三年十二月ニ至リ各國公使ト談判ノ末外國人遊獵
假規則四箇条ヲ設ケ續テ明治六年ニ至リ本邦人ニ適用

スヘキ銃獵規則ヲ制定シタルヲ以テ(同年一月廿日)當時
ノ外務卿ハ各國公使ト談判ノ末更ニ一ノ假規則ヲ草シ
同規則ヲ遵守スルモノニ限り遊獵ヲ許可スヘキ旨ヲ通
牒セリト虽氏各國公使之ニ同意セサリシカ爲メ遂ニ行
ハレス

明治七年ニ至リ尚一ノ規則案ヲ作り十一月十日附ヲ以
テ之ヲ各國公使ニ通シ其意見ヲ問ヒタリ然ルニ同草案
中銃獵規則違反ノ外國人ハ領事廳ニ於テ裁判スヘキモ
ノナリト虽氏之ニ科スヘキ罰金ハ日本政府ニ歸スヘキ
トヨ記載セリシカ爲メ各國公使ハ本國政府ヨリ相当ノ

訓令ヲ得タル上ニアテサレハ之ニ同意ヲナスヲ得ズト
ノ回答ヲ爲タリ是ヲ以テ帝國政府ハ翌八年六月迄ノ猶
豫ヲ興ヘ其確答ヲ求メタリシニ同年ニ至リ英國公使ハ
各國總代トシテ一ノ修正案ヲ提出シ日本政府ハ罰金ヲ
歸スルノ一条ヲ削除シタルヲ以テ我政府ハ其修正案ヲ
拒絶シ且各國公使若シ原案ニ同意セスハ外國人ニ遊
獵ヲ許可セサルヘシト回答セリ(八年九月廿三日)
南来我政府ト各國公使ト談判數次ニ及ヒタリト虽氏遂
ニ外國人ヲシテ我銃獵規則ヲ遵守セシムルニ至ラサリ
シカ明治九年ニ至リ各國公使連名ヲ以テ一ノ新案ヲ提

出之帝國政府ト協議ノ上尤ノ規則ヲ定メ今日ニ至ル迄
尚ホ之ヲ実行ス

第一外國人游獵セントスルモノハ豫メ一季拾円半季

五円ノ免許料ヲ本シ免狀ヲ受クヘキ事

第二免狀中ニ記載シアル條款ヲ遵守セサルハ日本政

府ハ民事訴訟ノ手續ニ由リ違反者ヲシテ十四ノ

償金ヲ拂ハシムルヲ

第三外國人無免許ニテ游獵スルハ領事ニ求刑シ本

國法ニヨリ之ヲ處罰スルヲ

(以上銃獵規則設立一件搜出中明治九年十月十日各國

公使ヨリノ咨柬以後ノ往復文書ニヨリテ詳ナリ)

右ノ規約ニ基キ英國公使ハ明治十年一月二日ヲ以テ無

免許狀銃獵禁制規則ヲ設ケ英國臣民ヲシテ之ニ服從セ

シメタリ(同上明治十年一月二日英公使書柬)

是ニ於テ銃獵規則設立ノ件モ一段落ヲ告ケタリト雖モ

今日銃獵者カ遵守スル規約ハ日本政府ト外國銃獵者ト

ノ間ニ取結ヒタル條件附ノ契約ノ類ニシテ毫モ行政規

則ノ性質ヲ有スルモノニアラサルナリ

二 檢疫規則ノ件

虎列刺檢疫規則設立ノ件ハ明治六年ニ開談シ同十五年

ニ結了ス其大略ヲ述ヘン

明治六年八月中上海地方ニ於テ虎列刺病流行シタルヲ以テ豫防ノ為メ各国公使ト核議ノ上檢疫規則ナルモノ設ケタリト虽氏實際之ヲ施行スルノ必要ヲ見ルニ至ラスシテ止ミヌ同規則中ニハ各口領事ヲ以テ檢疫委員トスルノ条文アリ檢疫ニ関スル規則設ク一件ニ規則案ニ付テ見ルヘシ

明治十年中九州地方ニ虎列刺流行シ遂ニ横濱ニ蔓延シタリ然ルニ明治六年ノ規則ハ種々ノ不都合ナル廉アルヲ以テ之ヲ実行スヘカラサルモノナルニヨリ十一年六月ニ至リ新案ヲ作り之ヲ各国公使ニ送り其意見ヲ諮詢

シタルニ直々ニ意見ヲ付シ之ヲ送還シタルヲ以テ我政府ニ於テハ同年七月更ラニ檢疫規則取調ノ為メ数名ノ委員ヲ命シ精密ノ規則案ヲ調整セシメ以テ之ヲ各国公使ニ示シタルニ或ハ全ク之ニ同スル者アリ公使或ハ條正案ヲ提出スル者アリ公使シカ独リ英國公使パークスハ我立法權ニ干渉シ英公使ノ許諾ヲ得ルニアラサレハ之ヲ英國船舶及ヒ其臣民ニ施行スルヲ得スト主張シタリ明治十一年八月三十日英口公使未東接夜規則設立一件外務卿ハ同年十月十五日附書東ヲ以テ英公使ノ主論ヲ并駁シ今般檢疫規則ノ如ク我國内各人ノ幸福保護ノ為

メニ要用ト認めル法律ヲ制定スルハ固ヨリ我政府ノ權
内ニ有之幾ニシテ之ヲ公許シ又ハ改正スルノ權利ヲ他
邦ノ政府ニ帰スルノ理由ハ無之事ニ云々ト回答シタ
リト虽氏英公使ハ尚ホ之レニ答ヘテ飽迄其前論ヲ固執
セリ十一月十日英公使來朝

斯ク各國公使トノ往復ニ時日ヲ送ルニ際シ虎列刺ハ已
ニ長崎ニ流行セリ愈々アジヤケツクコレラタル事判然
シタルカ故ニ我政府ハ差向キ長崎ヨリ神戸横濱ノ兩港
へ來航スル内外船舶ニ施スヘキ假規則ヲ設ケ之ヲ各國
公使へ通シタルニ或ハ緊急ノ件ナルニ付キ姑ク之ニ同

意スル旨ヲ回答シタルアリ伊口虽氏仏國公使異議ヲ
唱ヒタルカ爲メ遂ニ外國人一般ニ之ヲ施行スルニ至ラ
サリキ

明治十二年ニ至リ再ヒ西南地方ニ於テ虎列刺流行シ尋
テ神戸大坂ニ蔓延シタルヲ以テ我政府ハ更ニ假規則ヲ
設ケ該地方ヨリ來航ノ船舶ヲ相州長浦ニ停留スヘキヲ
命シ且ツ同年七月廿一日ニ至リ檢疫停船規則ナルモノ
ヲ制定シ之ヲ頒布シタリ外務卿ハ即日之ヲ各國公使ニ
送り來來右様ノ事件ニ関シ便利トセシ手續ノ方法ニ從
ヘ各埠港場ニ於テ各國人ヲシテ右規則ヲ遵守セシムル

為ニ要用ノ御處分有之度トノ旨ヲ照會セリ是レ蓋シ帝
國政府ニ於テ自ラ行政規則ヲ制定シ之ヲ各國公使ニ送
リ其本國人ヲシテ之ヲ遵守セシメン_トヲ依頼スルノ習
慣ヲ造出シタルノ矯矢タルヘシ

右ノ照會ニ對シ米國公使ハ直々ニ之ヲ兼諾シ独仏ノ公
使ハ脩正案ヲ提出シ其他ノ諸公使モ概テ反論セル者ナ
カリシニ独リ英公使ハ帝_ニ帝國政府ニ於テ制定シタル
規則ニ對シ異議ヲ唱フルノミナラス高木之ニ異ナル一
種ノ規則ヲ設ケ之ヲ英國臣民ニ布告シタリ
是ニ於テ我外務卿ハ七月廿九日附書柬ヲ以テ英公使ノ

処置ヲ難詰シタリト虽氏英公使ハ再ヒ書ヲ我外務卿ニ
致シ英國法廷ニ於テハ英國ノ法律ニ非ラサレハ之ヲ適
用スルヲ得サルヲ以テ英國人ニ檢疫規則ヲ遵守セシメ
ンニハ之ヲ英國ノ規則ト為サ、ル可ラサル旨ヲ弁シタ

十二年八月二日英國公使來東
リ檢疫規則設立一件四

檢疫規則設立一件書柬中右英國公使ノ書柬ニ對シ各弁
シタルモノナキヲ見レハ本件ニ関スル英公使トノ議論
モ是レニテ一段落ヲ告ケタルモノ、如シ其後明治十四
年某地入港船舶檢疫規則ナルモノヲ制定シ翌十五年ニ
至リ之ヲ改正シ更ニ船舶檢疫規則ナルモノヲ設ケ同年

六月廿三日第三十一号ヲ以テ之ヲ布告シ同月廿六日之
ヲ各國公使ニ送付シ其国人民ニ布達スヘキヲ依頼セリ
右ノ照会ニ対シ米伊独西オノ公使ハ直ク之ヲ諾シ英
公使ハ一ノ規則ヲ制シ其口民ニ布達シタル旨ヲ回答セ
リ檢疫規則設立
一件第五卷

爾來各地ニ於テ虎列刺病流行スルニ當リ帝國政府ニ檢
疫規則ヲ実行スルハ之ヲ各國公使ニ通知シ各國公使
ハ之ヲ其国人民ニ告知シ實際我檢疫規則ヲ遵守セシム
ルノ習慣ヲ成立セリ
又買三 外國人内地旅行ノ件

日本帝國ト諸外國トノ間ニ締結シタル條約面ニ因レハ
遊歩規定ヲ以テ定メタル場合ヲ除ケル外々國人ニ内地
ノ旅行ヲ許サス外國人等ハ其ノ約定アルカ爲メ不便ヲ
感スルノ點ナカラス是ヲ以テ各國公使ハ明治六年七月
廿六日同文ノ書柬ヲ以テ遊歩規程ヲ廢シ内地旅行ノ自
由ヲ請求シタリ外國人内地通行談判
一件第十一号
然ルニ當時我政府ハ岩倉全權大使ヲ歐米諸國ニ派遣シ
條約改正ノ談判ヲ試ミツ、アリシ際ナレハ同年八月七
日ノ書柬ヲ以テ大使歸朝ノ上内地旅行ノ許否ヲ相談ニ
及フヘシト答ヘ以テ各國公使ノ請求ヲ拒絶シタリ同上
第廿

然ルニ大使ハ同年九月中旬ニ帰朝シタルヲ以テ各國公使ハ再々同月廿七日書ヲ外務卿ニ送り同時ニ規則案ヲ添テ游歩及ヒ商賣ノ為メ内地旅行ノ自由ヲ外國人一般ニ附與センコトヲ請求セリ

爾後引續テ我政府ト外國公使トノ間ニ数次ノ談判ヲ開キタリト虽氏妥結ニ至ラスシテ遂ニ各國公使ノ請求ヲ拒絕シタリ然レモ我政府ハ之ヲ拒絕スルト同時ニ病氣療養學術研究其他止ヲ得サル事件アルモ從來ノ通り政府ノ好意ヲ以テ内地旅行ヲ許可スヘキコトアルヘシト

ノ旨ヲ通シタリ

同上ノ三第七十九号明治七年七月十三日外務卿ノ書

其後

其後明治八年五月ニ至リ内地旅行免狀改正ノ件ニ付キ各國公使ト尚數回ノ談判往復アリタレモ旅行免狀ヲ一ノ特例トシテ下付スルノ點ニ於テハ毫モ変更スル所ナシ外國人内地旅行免狀改三ノ一件第ニ号又同年六月十二日ニ至リ旅行免狀ノ雛形ヲ設定シ其ノ裏面ニ内地ヲ旅行スル外國人等カ遵守スルヘキ數條ノ規定ヲ掲ケ之ヲ各國公使へ通知シタリ同上六号

外國人ニ内地旅行免狀ヲ下付シタル沿革ト其手續トハ粗々前々陳ヘタルカ如シ而シテ之ヲ許可シタル当初ニ

アリテハ外国人等モ能ク内地旅行免状ノ精神ヲ守リ之
レニ関シテ諸般ノ規定ヲ遵守シタリト虽氏年ヲ逐フテ
内地旅行ノ外国人増加シ徒テ往々免状裏昏ノ條項ヲ守
ラサル者アルニ至シリ殊ニ其第四項及第五項ニ依レハ
免状ハ一回ノ旅行ニ限り効力ヲ有シ同一ノ免状ヲ數回
ノ旅行ニ使用スルヲ得ス又帰着後五日間ニハ必ス之ヲ
返約セサルヲ得サルノ規定ナルニモ拘ラス往々之ニ違
及スル者アルニ至シリ然ルニ十數年ノ間我政府於テハ
之ヲ不問ニ置キタルカ爲メ外国人等ハ我政府ヨリ附與
サレタル特典ヲ以テ殆ント自己ノ權利ノ如ク思惟スル

ニ至リタルヲ以テ政府ハ明治廿一年ニ至リ内地旅行免
状ノ下附ヲ嚴密ニシ旅行免状ナルモノハ原来政府ノ好
意ニ出ラタル特例ニシテ外国人カ權利トシテ其交附ヲ
請求シ得ヘキモノニアラサルヲ知ラシメタリ内地旅行免状
下付規則ノ義ニ付キ独逸公使ヨリ
照会ノ件送テ也五十四号

四 外國軍艦不開港場へ回航ノ件

諸國ト締結ノ條約中本件ニ関スル明文ナシ然ルニ明治
三年四月中佛國ノ軍艦佐賀ニ寄港セント欲シ在長崎ノ
佛國領事ヲ經テ其旨ヲ長崎縣知事へ通知シタルニ同知
事ハ中央政府ノ許可ナケレハ不開場港へ寄港スルヲ得

ストテ之ヲ拒絶シタリ

佛國公使ハ之ヲ不当ナリトシテ同國水師提督ト核議ノ

上ヂユブレクス號ヲシテ再々佐賀へ回航セシメ同所ノ

地方ニ就キ上陸ヲ請ヒタルニ拘シク之ヲ許容セス是ヲ

以テ公使ハ同年六月三日書ヲ澤外務卿へ送り千八百六

十二年ノ覺悟ドモランナルモノヲ根拠トシテ地方官

ノ處置其當ヲ得サルヲ訴ヘタリ外國船隻不開港場へ回航及停泊一件千八百六

公使ヨリ未東一是ニ於テ外務卿ハ文久二年ノ覺悟千八百六

中ニ軍艦十分ノ所以無之候ハ、不開港場へ入海不可致

トアルヲ理由トシテ而シテ其否十分ノ所以有無ハ我

政府ニ於テ断定スヘキモノナルカ故ニ外務省へ掛合ノ

上兼諾ヲ得ルニアラサレハ不開港場へ寄港上陸スルヲ

得サル旨ヲ答弁シタルニ同上第五号公使ハノ佛公使

ハ千八百六十二年ノ覺書ニ拠レハ軍艦ヲ不開港場へ回

航セシムルノ場合如何ヲ判定スルハ公使ノ権内ニアル

トニシテ殊ニ同覺悟三日本諸港へ軍艦尋問ノ儀決シテ

妨ヲナス可カラスト明記シアルヲ以テ我政府ノ許可ヲ

得ルヲ要セスト主張シタリ而シテ外務省ニ於テハ此ノ

弁駁ニ対シ更ラニ答弁シタルモノアルヲ見ス但謂千八百

百六十二年ノ覺書ナルモノハ條約彙纂ニ見ヘス

其後明治九年七月仙國軍艦「アタラシ」ト號若手縣下山田
港へ寄港シ乗組士官ハ上陸ノ上同地ヨリ數里隔リタル
宮古村へ遊行シタリトノ報地方廳ヨリ外務省へ達シタ
ルヲ以テ外務省ニ於テハ直チニ條約違約ノ廉ヲ以テ佛
國公使ニ掛合以後如以事ナカラシムル様公使ノ注意ヲ
請求セリ同上仙國軍艦「アタラシ」ト號ノ件第一号明治
九年十月廿五日仙國公使へノ書東
然ルニ仙國公使ハ千八百七十年八月廿三日暎外務卿へ
送リタル答弁書ト千八百六十二年ノ覺書ヲ引証シ同國
軍艦ハ日本政府ノ許可ナク不開港場へ寄航スルノ權ア
ルヲ主張シ又乗組士官等カ上陸旅行ヲ要スルハハ豫メ

政府ノ許可ヲ受ルノ当然ナルヲ認メタリ同上第四号十
年三月廿日佛

公使
未東

附言外務省ニ於テハ仙國公使ノ言ヲ可トシ本件ニ関
シ送付シタル書東ヲ取消タリ是ニ於テ外國軍艦不開
港場へ回航ノ件ハ一旦其局ヲ結ヒタリ

五 外國人ニ課税ノ件

現行條約中外國人ニ貸與スル地面ニ課スル税ニ関シテ
ハ特別ノ規定アリト雖地各港居苗一般ニ納税ノ義務ヲ
免除スルノ条文ナシ故ニ條約面ヨリ之ヲ論スレハ居留
地ノ内外ヲ問ハス凡テ日本國內ニ居住スル外國人ハ日

本人同様ニ國稅及地方稅ヲ納ムヘキ義務アルモノトス
且ツ外國人若シ納稅セサルキハ内國人同様ニ租稅滯納
處分法ヲ適用シ外國人ノ財産ヲ差押ヘ之ヲ徵収スルヲ
得ルモノナリ

或ハ云ハシ日本ノ裁判權外國人ニ施及セサルヲ以テ漫
ニ其財産ヲ差押フルヲ得スト蓋シ無謂ノ說ナリ既ニ前
段ニ於テ法權ニ関シ弁明シタルカ如ク本邦在留ノ外國
人ハ條約ニヨリ付與シタル權利ノ外別ニ有スルモノナ
シ租稅ノ事ニ於ケルモ亦然リ各般ノ條約中外國人ニ本
邦ノ租稅ニ関スル法律規則ニ服從セサルノ權利ヲ附與

シタルモノナキヲ以テ右等ノ法律規則ハ悉ク之ヲ外國
人ニ適用スルヲ得ルモノノ斷定セサルヘカス今假リニ一
歩ヲ讓リ本邦ノ裁判權毫モ外國人ニ施及セストスルモ
決シテ其財産ヲ差押フルノ權ナレト云フヘカラス滯納
處分法ニ從ヒ財産ヲ差押フルハ裁判權ヲ執行スルモノ
ニアラスシテ單ニ行政權ヲ執行スルニ過キサルナリ然
ルニ現行條約中我行政權ヲ制限シタルモノナキヲ以テ
條約ノ文面ヨリ之ヲ論スレハ外國人ニ對シ租稅滯納處
分法ヲ執行スルモ毫モ憚ル所ナキナリ

明治ノ初年ヨリ今日ニ至ルマテ外國人ニ地方稅ヲ賦課

スルノ件ニ関シテハ屢々其計畫アリシト雖此國稅ノ徵
収ニ付テハ未タ其企圖アルヲ見ス此計畫ノ最モ古キモ
ノハ明治元年ニアリ當時神戸港内ニ於テ居留地外ノ或
ル部分ニ限り内外國人雜居スルノ特典ヲ附與シタルヲ
以テ當時ノ地方官長伊藤俊助ヨリ各國領事ニ照會シ雜
居地内ニ住居スル外國人ニハ内國人同様租稅ヲ賦課ス
ヘキ旨ヲ通達シタリ然ルニ明治四年ニ至リ之ヲ徵収セ
ントスルニ當リ英國及ヒ其他ノ公使ヨリ種々ノ若情ヲ
申立テ遂ニ之ヲ実行スルニ至ラス其後明治七年ヨリ同
十五年迄ノ間屢々之ヲ計畫シタリト雖此各國公使トノ

協議整ハカリシカ為メ姑ラ之ヲ放擲スルニ至レリ神

雜居地及山手地
所地租改正一件

明治十八年ニ至リ兵庫縣令ヨリ神戸雜居地ニ居住スル
外國人ニ地方稅及ヒ町村費ヲ賦課スルノ可否ヲ内務省
ニ伺出テタルヲ以テ内務大臣ハ十九年二月八日之ヲ外
務大臣ニ照會シタリ然ルニ外務省ニ於テハ當時内地雜
居ノ一部ニ關スル借地料取立ノ義ニ付キ外國公使ト該
判中ナリシカ故ニ當分ノ中從來ノ通り據置度旨内務大
臣ヘ回答セリ

嗣テ明治廿一年ニ至リ英露米清等ノ公使ト神戸山手宅

地稅取極書ナルモノヲ取交ハシ山手賃地料取立ノ談判
モ其局ヲ結ヒタルヲ以テ同年十一月外務大臣ハ内務大
臣ト核議ノ上同十二月廿五日兵庫縣知事ニ訓令ヲ傳ヘ
廿二年ヨリ外國人ニ家屋稅ヲ賦課スヘク而シテ若シ之
ヲ納メサルハ外國領事ヘ出訴スヘク命シタリ以上神戸
戶港雜
居外國人ハ戸數割戸別割徵收及不納者処分
方兵庫縣令同ニ對シ内務大臣ヨリ核議ノ件
明治廿二年中大坂府ヨリ同地雜居地内ニ於テ本邦品ヲ
販賣スル者其他洋服革箱等ヲ製造販賣スル理髮俳優相
撲遊藝稼人等ノ業ヲ爲スモノニ對シ課稅スルヲ得ヘキ
ヤ若シ課稅スルヲ得ヘキモノトセハ直々ニ本人ヘ徵收

令書ヲ發シ可然哉ヲ外務大藏内務ノ三大臣宛テニテ伺
出タリ内務大臣ハ同平士年四月廿日附書ニ於テ
外務省ニ於テハ之ニ對シ課稅スヘキ權利アルハ爭フヘ
カラスト虽氏今日此ノ議ヲ提出スルハ未タ其時ヲ得サ
ルニ付キ當時之ヲ見合スヘキニ決定シ三大臣核議ノ上
其旨ヲ訓令シタリ大坂雜居地内ニ居住ノ外口人ニ課稅
ハ倭ニ付内府知事伺出ノ件
居苗地外ニ居住スル外國人ニ地方稅ヲ賦課スルノ件ニ
付テハ前記諸件ノ外尚長崎德島靜岡福岡ノ諸縣ヨリ
伺出タルヲ以テ長崎縣ハ明治廿一年十二月廿七日德
島縣ハ同廿八日靜岡縣ハ廿二年十月一日福岡縣ハ

同十二月五日ヲ以テ或ハ外務内務大蔵三大臣連名ニテ
或ハ内務大蔵兩大臣連名ニテ或ハ内務大臣一名ニテ夫
々訓令ヲ下シ外國人ヨリ地方税ヲ徴収セシムルノ決
シタリ然レモ外國人若シ納税セサル場合ニ於テ之ヲ知
分スルノ方法ニ付テハ外務省ト内務省トノ意見大ニ異
ナル所アルモノ、如シ

福岡縣知事ヨリ明治廿二年十一月二十日附ヲ以テ外國
人ニ對スル不約處分ノ手續ニ付キ内務省ニ伺出テタル
ヲ以テ内務大臣ハ同年十二月五日附ヲ以テ明治十年
七十九号布告ニ依リ處分スヘシト訓令シタリ
但シ德島
県ニモ同

様ノ訓令ヲ然ルニ外務省ニ於テハ右訓令ヲ以テ條約違
背ト認メ若シ之ヲ施行シ外國人ノ財産ヲ差押ヘ之ヲ公
賣スルスルハ人ノ財産權ヲ侵害スルノ如クタルヲ免
カレサルカ故ニ外國政府ヨリ右ノ如ク為ニ對シ損害要償
ヲ要求スルニ於テハ之ニ應セサルヘカラサルノ義務ア
ルニ因リ其趣ヲ德島福岡ノ二縣ニ訓示スヘキ旨外務大
臣ヨリ内務大臣ニ照會シタリ
居苗地外僑寓ノ外口人ハ
地方税戸數割所村税戸數
割賦課及其不納者知多方法内務省ニ注意ヲ促セシ件
廿三年三月三日外務大臣ヨリ内務大臣ニ書柬
然ルニ内務大臣ハ六月三十日附ヲ以テ外國人ト雖氏已
ニ納税ノ義務アル以上ハ納税滞納処分法ノ制裁ヲ受リ

一キハ固ヨリ当然ナレハ外國人ニ対シ該法ヲ執行スレ
ハトテ之レカ爲ノ條約ニ違背スルカ如キ都合ナカルヘ
シ故ニ納税義務及其制裁ニ至リテハ敢テ内外國人ヨリ区
別スル理由ナキヲ弁シタリト虽氏外務大臣ハ七月一日
附ヨ以テ之ニ答ヒ現行條約ニヨレハ外國人ハ帝國ノ裁
判所ニ於テ帝國ノ法律ニ從ヒ裁判ヲ受ルノ義務ナク又
帝國ノ法律ノ制裁ヲ受クヘキモノニ無之中略而シテ我
租税滞納処分法ハ帝國法律ノ裁判ヲ受クヘキ納税義務
者カ一般ニ服従スヘキ法律ナリト虽氏我法律ノ制裁ヲ
受クルノ義務ナキ者ニ対シテハ無論施行スルヲ得サル

モノトス故ニ外國人ニ対シ我カ法律ノ制裁ヲ施スハ條
約違背ノ處分タルヲ免レシ云々ト論シ地方官へ訓令ノ
取消ヲ請求シタリ是ニ於テカ内務大臣モ遂ニ外務大臣
ノ所論ニ服シ曩ニ福岡徳島ノ二縣ニ下シタル訓令ヲ取
消シタリ（廿三年八月廿三日内務大臣ヨリノ答）
居留地外ニ居住スル外國人ニ地方税ヲ賦課スルノ件ハ
是ニテ一旦其局ヲ結ヒタリト虽氏居留地内ニ居住スル
外國人ニ之ヲ賦課スルノ付テハ未タ着手セス本件ニ
関シテハ明治十二年中神奈川県ヨリ外國人所有ノ諸車
ニ地方税ヲ賦課スルノ議ヲ提出シタリト虽氏之ニ対シ

外務省ヨリ別ニ訓令ヲ發シタルモノ（神奈川県上野地方
人所有ノ諸車地方
稅賦課一件）

以上陳ヘタル如ニ依レハ帝國政府ハ或種美ノ地方稅ニ
限リ之ヲ居留地外ニ居住スル外國人ニ賦課スヘキニ決
シタリト雖モ國稅ニ至リテハ居留地ノ内外ヲ問ハス未
タ其ノ徵收ニ着手セズ唯外國人所有ノ船車ニ對シテハ
國稅ヲ賦課スルノニ決定シタリ（外國人居留地外ニ居住
スル外國人一本邦ノ人
同様ニ地方稅區町村費賦課徵收ノ義ニ付長壽縣知事伺
去ノ件明治廿年八月十五日外務大臣ヨリ内務大臣大藏
大臣一ノ書東
并ニ指令案）

附言外國人ニ對シ租稅ヲ賦課スルノ件ハ以上陳ヘタル

カ如シ以外尚ホ日本ニ於テ日本人力販賣スル外國商
品ニ對シ印紙稅ヲ賦課スルヤ否マハ實ニ重大ナル問
題ナリ目下スコツツ工マルシオカ下稱スル賣藥印紙
稅ニ關シ米國政府ト掛合中ナリ日本政府ハ之ヲ賦課
シ得ルモノトシ現ニ之ヲ徵收スルト雖モ米國政府ニ
於テハ之ヲ賦課シ得サルト主張シ今日ニ至ルマラ未
タ論決ニ至ラス（在橫濱米商支那及日本貿易商會ノ輸
入ニ係ルハスコツツ工マルシオカ下稱スルノ件）
乳菓賣藥規則ヨリ免許鑑札ヲ受
ケスレテ販賣スル者差止ノ件
外政規則ニシテ外國人ニ適用スヘキモノ右ノ外尚ホ數
多アリト雖モ現ニ外國人ニ對シ執行スル所ノモノハ殆

ント稀レナリ適々之レアルモ常ニ各國公使ト協議ノ上
設定シタルモノニ過キス加之外國人若シ之ニ違反スル
ハ其本國法ニ從ヒ之ヲ處罪スルモノトス(西洋形船水先免狀規則)
設立一件明治十二年三月四日外務卿ヨリ英口公使一ノ晉朝其他各國公使ト協議整カ
ルモノハ未タ之ヲ外國人ニ執行スルニ至ラス(并ニ鐵道規則)
領布一件石油取締規則設立一件藥用阿片輸入規則設立
一件遺失物規則外口人ニ及ハサル一件オノ書類參考

六 行政處分ノ件

現行條約中帝國政府ニ屬スル行政權ヲ制限シタル條文
ナシ故ニ外國人ニ對シ行政處分ヲ施行スルヲ得ルハ論
ヲ俟タスシ明ラカナリ今一二ノ條ヲ挙ケレハ居留地内

ニ發行スル外國新聞紙ニシテ若シ帝國ノ新聞條例ニ違
反シ國ヲ妨害スルモノト認めハキ記實論說ヲ掲載スル
ハ帝國政府ハ日本新聞ヲ處分スルト同一ノ方法ニ由
テ其發行ヲ停止スルヲ得ヘリ又場合ニ依リテハ其新聞
記者ヲ國境外へ追放スルヲ得ヘシ如キ處分ヲ施シタル
實例ハ往々外國ニ於テ見ル如シテ現ニ昨年中伊國ニ
於テ佛國新聞記者ニ退去ヲ命シタルカ如キハ即チ其一
例ナリ帝國政府ニ於テハ亦如キ權アルハ毫モ疑ヲ容レ
ス又外國人居留地内ニ於テ大藥取締規則ニ違反シ大藥
ヲ製造スルモノアラハ帝國政府ハ同規則ヲ三十條ニ由

リ行政処分ヲ以テ之ヲ禁止シ又ハ停止スルヲ得ヘシ之ヲ要スルニ行政処分ナルモノハ元来帝國政府力專斷ヲ以テ決行シ得ヘキモノナルヲ以テ敢テ内外人ノ別ナク之ヲ施行スルヲ得ヘキモノトス

帝國政府ニ於テモ外國人ニ對シ行政処分ヲ執行シタル实例甚ク稀ナリ明治廿一年中神戸港ニ於ケル棧橋撤去一件ノ如キハ蓋シ其最モ著シキモノナルヘシ（英國人ハ神戸東川崎町官有地貸渡ノ如右借主其權ヲ英口商橫濱棧及製造鐵道社讓渡借前海面中棧橋等造一件）

第三 外國人ニ對スル警察權
警察權ニ関シテハ本条約中特別ニ之ヲ規定シタルモノ

ナシ唯居留地取締規則等中ニ於テ僅ニ之ヲ規定シタルモノト虽氏或ハ單ニ居留地取締ノ為メ必要ト認ムル場合ニハ居留地警察ナルモノヲ設定スヘキヲ約シタルノミテ之ヲ支配スルノ權ハ誰ニ歸スヘキヤヲ確定セサルモノアリ（長崎地所規則第九條兵庫）或ハ外國人ヲ警察官ニ任用スヘキヲ約シ而シテ之ヲ支配スルノ權ハ未ク之ヲ確定セサルモノアリ（東京ニ外國規則附錄或ハ外國人ヲ以テ警察官ニ任用シ之ヲ支配スル六條）ルノ權ハ帝國政府ニ於テ之ヲ保持スルモノアリ（橫濱外國地取締規則第一條）

居留地ノ警察ニ関スル規定夫レ如ク区々ナリト虽氏彼
我条約中毫モ我警察權ヲ外國人ニ附與シタル跡アルヲ
見ス然ルニ外國人ニ對スル警察權ヲ施行スルノ実跡ヲ
觀察スル時ハ往々条約以外ノ特權ヲ許容シタルモノアリ
ルカ如シ左ニ各港市居留地警察ノ組織ヲ述ヘ而ル後警
察權ノ執行ヨリ生スル一二ノ問題ヲ論究スヘシ
一 居留地警察ノ組織

東京

東京ニ於テハ居留地警察ヲ設クヘキ規約アリシト虽氏
明治三年今日ニ至ルマテ之ヲ設ケタルナリ居留地外
ノ取極

ト同様警視廳ニ於テ之ヲ管掌ス唯警察權ノ執行ニ至リ
テハ大ニ異ナル所アリ後段ニ於テ之ヲ論スヘシ

横濱

横濱港ニ於テハ慶應三年ニ旧幕府ト各國公使トノ間ニ
取り替ハシタル會議書(条約彙纂ニハ「横濱外人」ナル
居留地取締規則トアリ)モ
モノニ基キ外國人ヲ以テ居留警察長官トナシ之ニ若干
ノ巡查(内外)ヲ附屬セシメ而シテ神奈川縣知事ヲシテ之
ヲ支配セシメタリシニ明治十年ニ至リ外國警察長官ヲ
罷メ本邦人ヲ以テ之ニ更ニ但其指揮スル所ノ巡查中ニ
ハ今尚ホ數人ノ外國人アリ

神戸及大坂

神戸大坂ニ於テハ行司警察ト称スル一種特別ノ居留地
警察ヲ設ケアリテ行司局ト称スル居留地常置委員ノ
如キ者ニシテ之ヲ支配シ而シテ居留地内ニ犯罪人アル
如キ場合ニハ内外人タルヲ向ハス凡テ行司警察官行司
局ノ命ヲ奉シ之ヲ逮捕ス之ヲ要スルニ居留地内ノ警察
ニ関スル事項ハ悉ク行司局ニ於テ之ヲ管掌シ恰モ一個
ノ独立国ヲ為スノ看ヲ呈ス

神戸ニ行司警察規則ヲ設ケタルハ明治五年ニアリ(百十八
年)居留地會議ニ於テ同規則ヲ設定シタル際當時ノ兵

庫縣令ハ議員ノ資格ヲ以テ居留地會議ニ出席シ同意ヲ

表シ而ル後之ヲ設定シタルモノナルヤ否ヤ分明ナラス

ト虽氏(神奈川)神戸大坂長崎居留地今日ニ至ル迄尚

ホ之ヲ施行ス(今日ニ行ハル)行司警察規則ハ千八百

大坂ニ於テハ開港已来居留地番人ト称スルモノアリテ

其取締ヲ為シ大坂府ノ管轄スル所ナリシニ明治六年ニ

至リ大坂居留地會議ニ於テ神戸ト同様ノ警察規則ヲ設

ケ之ヲ実施スルニ至レリ

神戸大坂ニ於ケル居留警察ノ制ハ条約ヲ以テ外國人ニ

附與シタル權利ニ基クモノニアラス彼ノ居留地取締ノ

為ノ大坂兵庫外國人居留地條約書中ニ新ハ居留地警察ヲ設クヘキ約アリト雖モ警察權ヲ奉ケラ居留地行司局ニ附與シタルトナシ是ヲ以テ大坂府ニ於テハ明治八年ニ居留地警察權ヲ回復スルノ企圖アリシト雖モ之ヲ果サスシテ止ミヌ（各港市場外國人居留地ノ取締支配權提要兵庫及ヒ大坂ノ取部）

長崎

萬延元年（千八百六十一年）ノ長崎地所規則中居留地警察ヲ設ケルノ規約アリ是レニ因リ同年ヨリ明治八年ニ至ル十六年間所謂番人ナル者ヲ置キ居留地ノ取締ヲ為サシメ外國領事之ヲ支配シタリ然ルニ明治八九年頃該規則実施ノ

当否ニ付キ英國領事ト各國領事トノ間ニ紛議ヲ生シ遂ニ居留地番人ヲ廢シ我警察官ヲシテ之ヲ代ハラシムルニ至レリ（居留地取締ニ関スル事項長崎ノ部）

箱館新潟夷港

此等ノ諸港ニ於テハ居留外國人ノ數甚ク僅少ナルヲ以テ特ニ居留地警察ヲ設ケルノ必要ナカリシ為メ之ヲ設ケス唯居住ノ外國人ニ對シ我警察ヲ執行スルニ當リテハ内外人ノ間大ニ異ナル所アリ

二 警察權ノ執行

警察權ノ執行ニ関スル問題ヲ論究スルニハ宜シク行政

警察ト司法警察トヲ區別スヘシ
行政警察ハ行政權ノ一部分ニシテ毫モ條約ヲ以テ制限
サレタルモノニアラス故ニ内外人ノ別ナク之ニ對シ執
行スルコトヲ得ナリ然ル今日迄ノ實況ヲ見ルニ往々然ラ
サルモノアリ左ニ一ニノ實例ヲ掲ケ之ヲ詳ニセンニ明
治十八年十月廿日內務卿ヨリ警視廳及各府縣ヘ達シ今
日現ニ行ハル、外國人取扱巡査心得ニ依レハ常ニ内外
人ノ取扱ヲ異ニスルノミナラス其方三十一條ニ規定ス
ルモノ、如キハ大ニ我警察權ヲ侵害スルモノナリ同條
ニ依レハ外國人車馬止ノ榜示ヲ犯シテ通行セントスル

トキハ車夫馭者馬丁ニ向ヒ説諭シテ引戻サレムヘシ若
シ外國人又ハ車夫馭者馬丁ニ於テ引戻ヲ肯セサキハ其
住所氏名等ヲ聞取シテ放還シ之ヲ警部ニ申報スヘシト
アリ然リ前陳ノ如ク現行條約中我行政警察權ヲ制限シ
タルモノナケレハ何故ニ以上ノ如キ場合ニ於テ外國人
ヲ放還スルノ必要アルヘキヤ若シ喻シテ之ヲ肯セサル
キハ權カヲ以テ之ヲ制止シテ可ナリ豈ニ敢テ之ヲ放還
スルヲ要センヤ我內務省ニ於テ如キ規則ヲ設ケタ知以
ノモノハ蓋シ帝國ノ法律ハ毫モ外國人ヲ支配スルノ効
カヲ有セストノ誤想ヲ抱持シタルニマルヘシ

以上陳一タル所ハ外國人ノ身体ニ對シ行政警察權ノ及
ハサル一個ノ特例ナリト雖モ外國人ノ家宅ニ對シテモ
亦我警察權ノ及ハサル如ハ帝ニ居苗地内ニ於ケル家宅
ノミナラス尚ホ神戸雜居地ノ如キ居苗地外ナル家宅ニ
於ケルモ亦然リ

明治廿一年七月中兵庫縣令ヨリノ伺ニヨレハ神戸雜居
地内ナル外國人ノ家宅ニ於テ日本婦女ニシテ賣淫ノ醜
業ヲ爲ナサシムル等ノ事アルトキハ日本警察官ハ敢テ
其家宅ニ入り取調ヲ爲カ如キ所為ニアリシコトナカリシ
モノハ如シ然ルニ右伺ニ對シ外務大臣ハ内務大臣ト核

議ノ上日本人ノ家屋同様ニ取扱フヘシト訓令ヲ下シタ

リ神戸雜居地内ニ居住スル外國人ハ我警察權施行ノ件
廿一年七月廿六日外務大臣ヨリ内務大臣ヘノ昏東并

ニ指
令案

現行條約ニ依レハ居苗地内ナル外國人ノ居宅ト雖モ尚
ホ我行政警察權ノ及ハサル理由ナシ然ルニ居苗地内ノ
居宅ニ関シテハ未タ之ヲ實行セント試ミタルコトアルヲ
聞カス蓋シ我警察權ノ各用港場ニ於テ行ハレサル習慣
ヲ養成シタル所以ノモノハ開港ノ當時ヨリ現行條約ハ
外國人ニ完全ナル治外法權ヲ附與シタルモノ、如ク思
惟シ各國ノ公使領事等ト核議ヲ要セサル事件ニ至ル迄

外國人ニ関スル事項ハ悉ク之ト協議シ其同意ヲ得タル
後ニアラサレハ之ヲ実行セサルノ惡習慣ヲ造出シタル
因ルヘシ而シテ此習慣ハ帝ニ察權スル事項ノミナラ
ス他ノ各般ノ交渉ノ事件ニモ相行ハレ近年ニ至ル迄依
然存在シタルノ跡アリ明治廿一年七月十日
六日兵庫縣知事尙夫レ然リ故ニ
外國公使領事等ハ本國人ニ不利ナリト認ム場合ニハ常
ニ中央政府又ハ知事ノ協議ニ應セスシテ漸々我國有ノ
ノ權利ヲ侵害スルニ至リタルモノ、如シ

警察權ニ関シ我權利ヲ侵害スルノ最モ甚シキモノハ本
邦人ト虽氏苟モ外國人ノ家宅ニ住居スル以ハ之ニ對シ

我警察權ヲ執行スルヲ得サルニ至リタルト即チ是レナ
リ而シテ我警察官カ外國人ニ雇役セラル、本邦人ノ戸

籍ヲ調査スルヲ得サルカ如キハ其最モ著シキ实例ナリ

トス横濱ニ於テ外國人召使
ノ戸籍調査一件提要

司法警察權ニ至リテハ居留地ノ内外ヲ問ハス殆ント行
ハレサルモノ、如シ左ニ其最モ著シキ实例ヲ挙ケト

一 犯罪人逮捕

犯罪人逮捕ノ件ニ関シテハ本邦ニ於テ罪ヲ犯シタル場
合ト外國ニ於テ罪ヲ犯シタル場合トヲ區別セサル可ス
又本邦ニ於テ罪ヲ犯シタル者ハ現行犯ト非現行犯トヲ

區別セザル可ラス
甲外國人本邦ニ於テ罪ヲ犯シタル場合
不非現行犯ノ場合ニ於テハ其犯罪ノ何タルヲ問ハス我
令状ヲ以テ之ヲ逮捕シタルノ例ナク帝國巡查ハ常ニ外
國領事ノ令状ニ依リ外國犯罪人ヲ逮捕スルコトナレシ
第一章ニ陳タル如ク外國人ニ對シ令状ヲ發スルノ權ハ
外國領事ノ專有ニ歸スヘキモノナリトノ說ヲ可トスル
キハ今日ノ狀態アルモ敢テ怪ムニ足ラス虽モ若シ第二
說ニ從ヒ令状ヲ發スルノ權ハ彼我共有ノモノナリトノ
說ヲ採ルトキハ實ニ條約以外ノ權利ヲ外國人ニ附與シ

タルモノト云ハサル可ラス
東京横濱長崎新潟箱館等ニ於テハ我警察官外國領事ノ
令状ニ依リ外國犯罪人ヲ逮捕スルカ故ニ我警察權ノ一
部分ハ尚ホ之ヲ執行スルノ實アリト虽モ神戸大坂ノ居
留地内ニ於テハ彼ノ行司警察ノ制アルカ爲メ我警察權
專モ行ハレス且最モ甚シキモノハ帝國臣民ニシテ居留
地内ニ於テ罪ヲ犯シタルキ又ハ他野ニ於テ罪ヲ犯シ居
留地内ニ逃亡シタルキト並ニ尚我警察官之ヲ逮捕スル
得ズ以習慣ハ蓋シ行司警察ノ制ト同時ニ起リタルモノ
ナルヘシ

口現行犯ノ場合ニ於テハ我警察官外國犯人ヲ逮捕スルノ習慣アルモノ、如シ外國人居留地ノ取締扱心提提要然レ氏實際ノ有様ヲ聞クニ現行犯ト虽氏往々逮捕スルヲ得サル場合アリト云フ在橫濱大裁判所

乙外國ニ於テ罪ヲ犯シタル場合

外國ニ於テ罪ヲ犯シタル者ニシテ本邦へ渡来スル者ハ外國領事ハ之ニ対シ毫モ裁判權ヲ有セサルカ為メ之ヲ逮捕スルノ權ヲ有セス然ルニ明治廿二年六月中西班牙犯罪人「ソイロ」ニエヴエス「ナル」モノ香港ヨリ橫濱ニ来着シタルヲ以テ同國領事之ヲ逮捕シ又同年九月中英國

領事ハ香港ヨリ渡来シタル同國犯罪人「カムボス」ナル者ヲ神戸ニ於テ逮捕シタリ我外務省ハ兩國領事ノ處置ヲ不當トシ種々裁判ノ未遂ニ領事ノ逮捕シタル犯罪人ヲ解放セシメ帝國換事ノ令狀ニ依リ巡查ヲシテ更ラニ之ヲ逮捕セシメ而ル後外國犯罪人引渡ノ手續ヲ設ケ其國政府ノ請求ニヨリ之ヲ引渡シタリ馬尼刺監獄ヲ脱シタルソイロイニエヴエ

丙外國人ノ家宅搜索

外國人ノ身体ニ対スル我警察權執行ノ狀態ハ以上陳ヘタルカ如シ尤ニ其居宅ニ対スル我司法權執行ノ現況ヲ

述(一) 外國人ノ家宅ニ對スル司法警察權ニ関スル實際ノ問題
ハ家宅搜索ノ場合ニ起ルモノトス例ヘハ本邦犯罪人外
國人ノ家宅ニ潛匿スル場合ニハ帝國警察官ハ檢事ノ令
狀ヲ所持シ治罪法第三十三條及第百六十二條ニ依リ外
國人ノ家宅ニ進入スルヲ得ヘキヤ

帝國ノ法律ハ毫モ外國人ニ及ハスト信スル者ハ帝國ノ
法律ハ其家宅ニモ亦及フヲ得ス故ニ我巡査ハ領事ノ
許可ナクシテ外國人ノ家宅ニ進入スルヲ得ス論スヘシ
ト雖氏現行約条中ニハ未タ如以持典ヲ外國人ニ附典シ

タルモノアルヲ見ス外國人ノ家宅ニシテ帝國法律ノ規
定如何ニ拘ハラス之ヲ侵スヘカラサルモノハ單ニ各國
公使館アルノニ而シテ現行條約中各國公使同様ノ權利
ヲ普通外國人ノ家宅ニ附典シタルモノナシ故ニ外國人
ノ家宅ハ其居苗地内ニアルト居苗地外トアルトヨ問ハ
ス帝國法律ノ規定ニ服從セサル可ラス云ハサルヲ得ス
然ルニ今日迄ノ有様ヲ見ルニ居苗地内ハ無論居苗地外
ト雖氏外國人ノ家宅ハ帝國ノ法律以外ニアルモノ、如
ク思惟シ領事ノ令狀ヲ候自テ後外國人ノ家宅ニ進入ス
ルノ習慣アリ

本問題ニ関シテハ明治廿二年六月中兵庫縣知事ヨリ内務外務兩大臣宛テノ伺アリト雖氏之ニ対スル訓令ナシ唯外務取調局長ヨリ六月廿四日附ノ半公信ヲ以テ兵庫縣知事ニ照会シ神奈縣ニ於テ実行セル慣例ニ依テ領事ノ令状ヲ請求スヘキヲ勸告シタルモノアリ神戸雜居地内ニ住居スル外國人ハ我警察權施行ノ件廿二年六月廿四日取調局長書柬

第四 外國人ニ対スル裁判執行

外國人ニ対シ我法廷ニ於テ下シタル裁判ヲ執行スル場合ハ外國人原告トナリ我法廷ニ出訴シテ失敗シタルハ外其例アルヲ見ス而シテ此場合ニ於テ訴訟入費ヲ払

フヘキ裁判ヲ下シタルハ原告外國人ハ之ニ服従スルノ義務アルハ論ヲ俟タス
本件ニ関シテハ各開港市裁判所ノ習慣甚々區々ニシテ或ハ訴訟入費弁済ノ爲メ豫メ若干ノ保証金ヲ出サシムルアリ或ハ又タ訴訟入費ヲ払フヘキ裁判ヲ下サ、ルモノアリ左ニ内外人交渉事件ノ最モ頻繁ナル横濱始審裁判所ノ習慣ヲ述フヘシ
明治六年中我政府ニ於テ訴訟入費償却規則ナルモノヲ發布シタルニ際シ當時ノ裁判所長ハ各國領事ニ照会シ之ヲ施行セシトヲ試ミタルニ米蘭、丁瑞ノ領事ハ之ヲ兼

諾シタルニ付キ右四ヶ國人原告タルトキハ保証金ヲ前
納セシメ之ヲ以テ訴訟入費ニ充テ若シ不足スルハ領
事ニ照会シ之ヲ追収セシムルノ習慣ヲ造出セリ
然ルニ英、独、仏、伊四ヶ國ノ領事ハ右規則ニ服従スヘキ理
由ナシト主張シタルヲ以テ爾來訴訟入費ニ対スル裁判
ヲ下サ、リシカ明治十八年ニ至リ英國人ニ限り裁判所
ト英國領事ト熟議ノ上談入費ヲ償却スヘキ旨言渡ス
ニナレリト云フ又本年八月ニ至リ司法大臣ヨリ英國人
ニモ保証金ヲ前納セシムヘキ訓令アリタシ此下訓以來
日尚ホ淺クシテ未タ之ヲ言渡シタル實例ナシト云フ以

横濱大判取某判事
ヨリ通知ニ拠ル

但シ各港習慣ノ異同ニ関シテハ英國人ニ對スル訴訟
ニ係リ我原告人証拠金前納ノ義ニ付神奈川某同業
ニ指令至明治十六年ニ詳カナリ

附録 海峽通商手続規則
 現行條約ハ沿海貿易權ヲ外國人ニ附与シタルヤ否ヤノ
 問題ニ関シテハ茲ニ二說アリ
 第一說ニ曰ク沿海貿易權ナルモノハ至大至重ノ權利ニ
 シテ歐米各國何レノ國ト虽氏概テ皆自國人ノ專有ニ歸
 セサルハナシ適々之ヲ外國人ニ附與スルモノアルモ必
 ス條約ノ明文ニヨリテ之ヲ付与スルモノトス然ルニ現
 行條約中ニハ沿海貿易權ニ関シ特別ノ規定ヲ設ケタル
 モノナシ故ニ外國人ハ本邦ニ於テ沿海貿易權ヲ有セサ

附録 海峽通商手続規則
 現行條約ハ沿海貿易權ヲ外國人ニ附与シタルヤ否ヤノ
 問題ニ関シテハ茲ニ二說アリ
 第一說ニ曰ク沿海貿易權ナルモノハ至大至重ノ權利ニ
 シテ歐米各國何レノ國ト虽氏概テ皆自國人ノ專有ニ歸
 セサルハナシ適々之ヲ外國人ニ附與スルモノアルモ必
 ス條約ノ明文ニヨリテ之ヲ付与スルモノトス然ルニ現
 行條約中ニハ沿海貿易權ニ関シ特別ノ規定ヲ設ケタル
 モノナシ故ニ外國人ハ本邦ニ於テ沿海貿易權ヲ有セサ

ルモノト云ハサルヘカラス（條為改正ニ関スル意見書類
第十一号ボアソナード氏發
見）

見

第二説ニ曰ク安政年間ニ英米仏等ト締結シタル条約ニ
ハ前説ニ云ヘル如ク沿海貿易ニ関シ毫モ規定シタルモ
ノナシ故ニ英米仏ノ条約ニ遵拠シテ立論スルハ外國
人ハ本邦ニ於テ沿海貿易權有セスト虽氏明治二年澳國政
府ト締結シタル条約ニヨレハ英米ニ付キ大ニ疑ナキ能
ハス尤該條約中ニモ明ラカニ外國人ニ貿易權ヲ附与シ
タルノ明文ナシト虽氏同条約第十一條及同第十三條ト
ヲ对照熟讀スルハ之ヲ附與シタルモノト看做サルヲ

得サルモノ、如シ第十一條ニ曰ク自由ニ其商賣ニ便ス
得サルモノ、如シ第十一條ニ曰ク自由ニ其商賣ニ便ス

澳地利及洪噶利人民日本國ノ開港場ニ於テ買入タル
日本產物ヲ日本他ノ開港場ニ諸税ヲ拂フヲナク輸送
スルヲ勝手タルヘシ（條約ニ依リテ日本國ノ開港場ニ於テ買入タル
日本產物ヲ日本他ノ開港場ニ諸税ヲ拂フヲナク輸送スルヲ勝手タルヘシ）

本條ノ規定ニ依レバ澳國人ニシテ日本ノ一開港場ニ
於テ買入レタル日本品ヲ他ノ開港場ヘ輸送スルヲ得ル
ノ權利ヲ有スルモノトス（日本國ノ開港場ニ於テ買入タル日本品ヲ日本他ノ開港場ニ輸送スルヲ得ルノ權利ヲ有スルモノトス）
尤モ本條ニ於テハ何ノ國ノ船舶ヲ以テ荷物ヲ輸送シ得
ルヤ否ヲ規定セサルカ故ニ本條ノミニ就テ之ヲ論スル
ハ未タ沿海貿易ノ權アリト云フヘカラスト虽氏之ヲ

同第十三条ノ末項ト对照スルキハ本条ノ精神モ亦沿海
貿易ノ権ヲ附與スルニ在リシト推定セサル可ラサルナ
リ同條ニ曰ク

總テ日本人ハ日本産物又ハ他國ノ産物ヲ日本開港場
一或ハ日本ノ開場港ヨリ或ハ日本開港場ノ間ニ或ハ
他國ノ港ヨリ或ハ他國ノ港へ日本人民或ハ澳地利及
洪嚙利人民所持ノ船ニ積入レ輸送スル一勝手タル一

本条ノ規定ニ依レハ日本人ハ日本人所持ノ船舶又ハ澳
國人所有ノ船舶ヲ以テ各開港場間自由ニ其荷物ヲ輸送

スルノ権利アリ而シテ本条ニハ外國人ハ日本人同様ノ
権利アルヲ明言セスト虽氏既ニ第十一条ヲ以テ各開港
場間輸送ノ権ヲ附與シタルカ故ニ日本人同様ノ権利ヲ
有スルハ論ヲ保タスシテ明ナリ果シテ然ラハ日澳条約
第十一条及同第十三条ヲ对照スルキハ尤ノ論結ヲ得ヘ
キ
第一内外人ノ別ナク日本ノ一開港場ヨリ他ノ開港場
へ其荷物ヲ輸送スルノ権利アル一
第二内外人ノ別ナク日本船又ハ外國船ニ搭載シテ其
荷物ヲ輸送スルノ権利アル一

以上陳へタル所ニシテ果シテ誤ナカラシメハ内外人ノ
別ナク日本船又ハ外國船ニ其荷物ヲ搭載シテ日本ノ各
開港場間ニ其荷物ヲ輸送スルノ權利アルハ蓋シ争フヘ
カラサルナリ又既ニ外國船ヲ以テ荷物ヲ輸送ス
ルノ權利アルヲ認定シタル以上ハ其外國船ハ荷物ヲ搭
載シテ日本ノ各開港場間ヲ往來スルノ權利アルモノト
認メタルモノト云ハサルヘカラス何トナレハ外國船ニ
シテ其ノ權利ナケレハ外國船ニ荷物ヲ搭載シテ之ヲ輸
送スルノ權利ヲ附與スルノ必要アラサルナリ然ルニ沿
海貿易ナルモノハ元來各港間荷物ノ運送ヲ業トスルニ

過キサルヲ古テ外國船ニシテ各港間荷物ヲ輸送スルノ
權利ヲ有スルモノトスレハ外國人ハ本邦ニ於テ沿海貿
易ノ權利ヲ有スルモノト云ハサル可ラサルナリ
或ハ曰ハシ荷物ヲ運漕スルノ船舶外國人ノ所有ニ屬ス
ルノ故ヲ以テ未タ必スシモ外國人運漕事業ヲ營ムノ權
アリト云フヘカス何トナレハ船舶ノ所有權ハ外國人ニ
アリト雖モ日本人之ヲ雇入レ運漕ノ用ニ供スルヲ得ヘ
ケレハナリト
或ハ又云ハシ此場合ニ於テハ船舶ハ外國人ノ所有ニ屬
スト雖モ運漕事業ヲ營ム者ハ日本人ナリ日澳條約不

十三條ニ日本人ハ外國船ヲ以テ荷物ヲ輸送スルヲ得ル
トアルハ蓋シ如以場合ヲ指ホスルニ過キサルヘシ故ニ
船舶ノ所有權外國人ニ屬スルノ故ヲ以テ未タ必スシモ
運漕支業ヲ營ムノ權アリト断定スヘカラサルナリト
該條約第十三條ノ文面ニ拘泥スルトキハ或ハ論者ノ如
キ解釈ヲ為スヲ得ヘシト雖氏結約者ノ精神ヲ推究スル
ハハ蓋シ附会ノ解釈タルヲ免カレサルヘシ

日澳條約締結ノ當時ヲ回想スルニ(明治二年)未タ本邦人ニシ
テ外國形船舶ヲ以テ運漕支業ヲ営ムモノナク而シテ當
時該業ニ従事スル者ハ單ニ米國大平洋郵船会社アルノ

ニ故ニ當時ノ有様ニ就テ觀察スルトキハ外國船(即チ外

所有船ニシテ外國人カ運ヲ以テ荷物ヲ運漕セシムルハ

本邦人ノ為メニ大ニ利益アリシ者トス是蓋シ日澳條約

ニ日本人ハ外國船ヲ以テ日本ノ一開港場ヨリ他ノ開港

場ニ荷物ヲ輸送スルヲ得ルト特畧シタル所以ナルヘシ

結約者ノ精神ニシテ若シ日本人カ日本人カ雇入レタル

外國船ヲ以テ荷物ヲ輸送スルヲ得ルノ權アルヲ指示ス

ルノ意ナリトセハ毫モ本條ヲ設クルノ必要ナシ何トナ

シハ條約中ニ明言セスト雖氏本邦人カ如以權利ヲ有ス

ルハ敢テ疑ヲ容レサレハナリ

以上陳へタル所ニ由テ觀レハ日澳條約第十三條ハ外國
人沿海貿易ノ權アルヲ認定シタルモノト云ハサルヘカ
ラス

今一步ヲ讓リ假リニ外國人ハ條約ノ正文ニ據リ沿海貿
易ノ權ナシトスルモ今日外國政府ニ對シ之ヲ主張スル
ハ蓋シ甚々難事タルヘシ何トナレハ幕府以來數十間ノ
慣例之ヲ許サレハナリ

安政年間ノ條約ニハ沿海貿易ニ關スル規定ナシ然ルニ
慶應三年太平洋郵船会社ニ於テ向後橫濱ヨリ長崎ヲ經
テ香港上海ホヘ定期航海ヲ開始スルニ付同年正月米國

公使ヨリ同会社ノ爲メ長崎ニ於テ波戶場ヲ築造シ且ツ
倉庫ヲ建築スルノ許可ヲ請求シタルニ談判數次ニ至リ
遂ニ之ヲ許可シタリ統テ同年十一月ニ至リ神戸開港ニ
日前橫濱ヨリ長崎ヲ經テ上海ヘ通航ノ米船コスタリカ
號ヲ神戸ニ寄港セシメ同所ニ於テ旅客ヲ上陸セシムル
ト米公使ヨリ請求シタル事アリ

是ヨリ先キ橫濱上海間ノ航路ヲ開クノ議起ルヤ外國奉
行ハ之ヲ以テ至極良法ニテ御國ノ便利不少モノトシ郵
船規則ナルモノヲ起草シ神奈川奉行ヘ廻附シ其意見ヲ

問ヒタリ
慶應三年
八月十九日

然ルニ爾後數次往復ノ末遂ニ神奈川奉行ハ原案ヲ脩正
シ更ニ日本米國郵便船使用ノ規則ナルモノヲ起草シ
之ヲ外國總奉行并ニ外國奉行宛ニテ廻附セリ同詳同規
則案ニ披シハ運上野(稔)ノ免許ヲ得タル日本人ハ
外國船舶ニ乗組ニ各開港場間ヲ旅行シ又ハ荷物ヲ輸送
スルヲ得タリ

右規則案ヲ外國奉行ヨリ米國公使ニ示スマ否ヤ公使ハ
異議ヲ唱ヒ各開港場間ハ右規則ナキモ已ニ差支ナケレ
ハ横濱ヨリ長崎間ハ不開港場ト雖氏外國船之ニ寄航ス
テ旅客又ハ荷物ヲ運送スルノ免許ヲ得タレ云々ト申出

タリ是ニ於テカ彼我相互ノ意相符合セサルヲアリトテ
郵船規則設定ノ談判モ一旦中止セリ(慶應三年十月四日
米國公使ト應接ノ
意)

其後太平洋郵船会社ハ其業ヲ始メ數年間之ヲ継続シタ
リト雖氏其間帝國政府ニ於テハ曾テ之ニ對シ異議ヲ唱
ヘタル事蹟ナシ(以上續通信全覽
第三百四十七卷)

明治ノ初年三菱郵便汽船会社ノ起ルニ當リ太平洋郵船
會ハ暫ク之ト拮抗シタリト雖氏遂ニ其功ヲ奏スル能ハ
ス明治八年ニ至リ同会社ノ船舶ヲ奉ケテ悉ク之ヲ三菱
會社ニ賣渡シ是ニ於テ沿海貿易ノ實權我ニ歸スルニ至

5年1月



レリ然レ氏如以沿海貿易ノ実権我ニ帰シタル所以ノモ
ハ、各國政府ニテ、
導抑シ之ヲ回復シタルニア

ヨルモノニシテ即チ優勝者
ラサルナリ

府ニ於テハ幕府以来近年ニ
沿海貿易権アルヲ認メタ

ハシ

意林合...

レリ然レモ如キ沿海貿易ノ實權我ニ歸シタル所以ノモ
ノハ帝國政府ニ於テ条約ニ遵照シ之ヲ回復シタルニア
ラス全ク私設会社ノ競争ニヨルモノニシテ即チ優勝劣
敗ノ天理ニ基キタルニ外ナラサルナリ

是ニ依テ之ヲ見レハ帝國政府ニ於テハ幕府以來近年ニ
至ル迄外國人ニ各開港場間ノ沿海貿易權アルヲ認メタ
リト云フモ敢テ不可ナカルヘシ

是ニ依テ之ヲ見レハ幕府以來近年ニ至ル迄外國人ニ各開港場間ノ沿海貿易權アルヲ認メタリト云フモ敢テ不可ナカルヘシ

